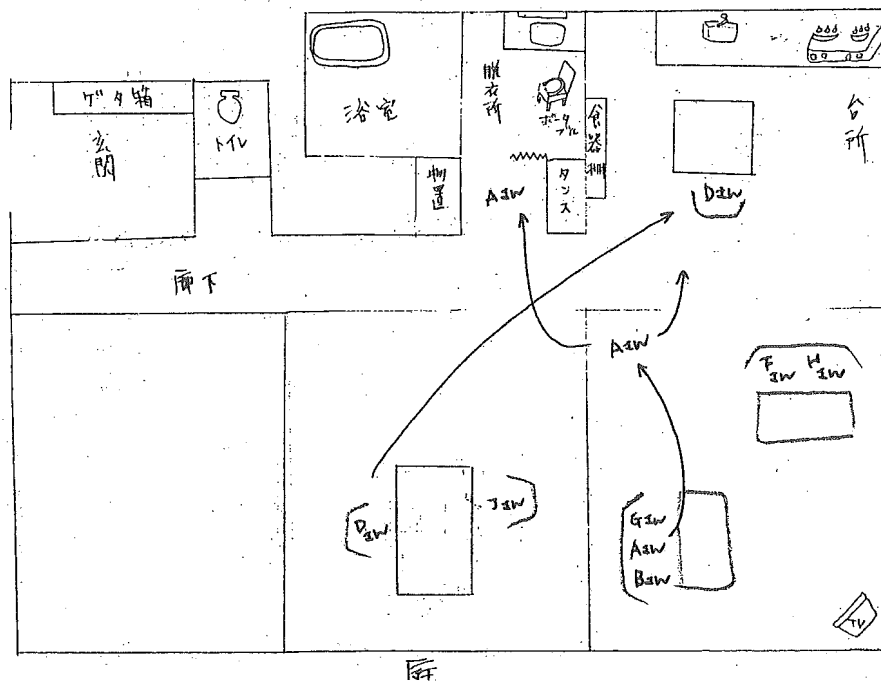


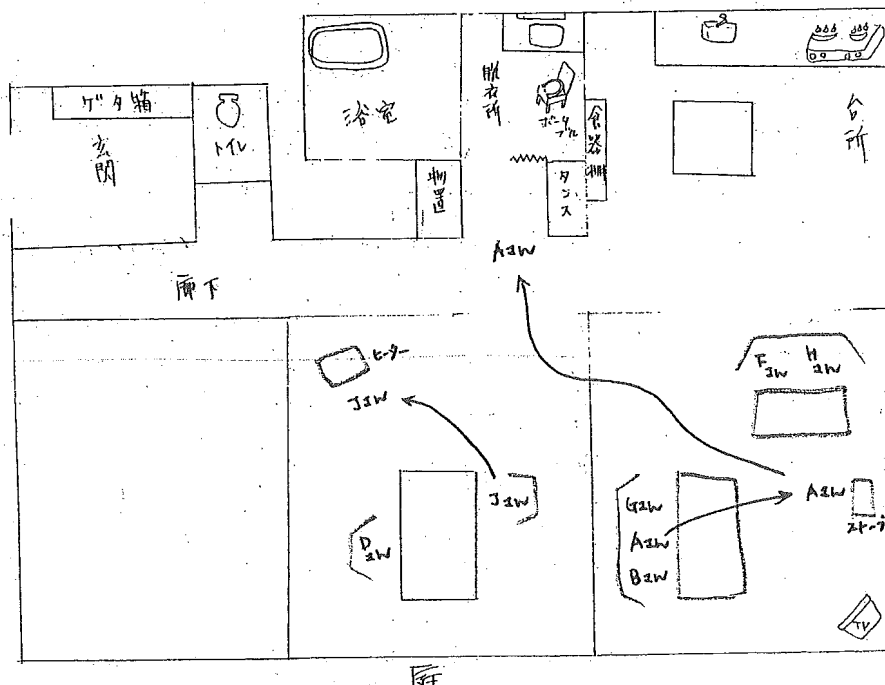


5ヶ月目(11月～)

ストーブが入り、Jさんがストーブの前で過ごすことが多くなる。

Aさん：ソファにすることが多いが、ストーブにあたたまりに行く

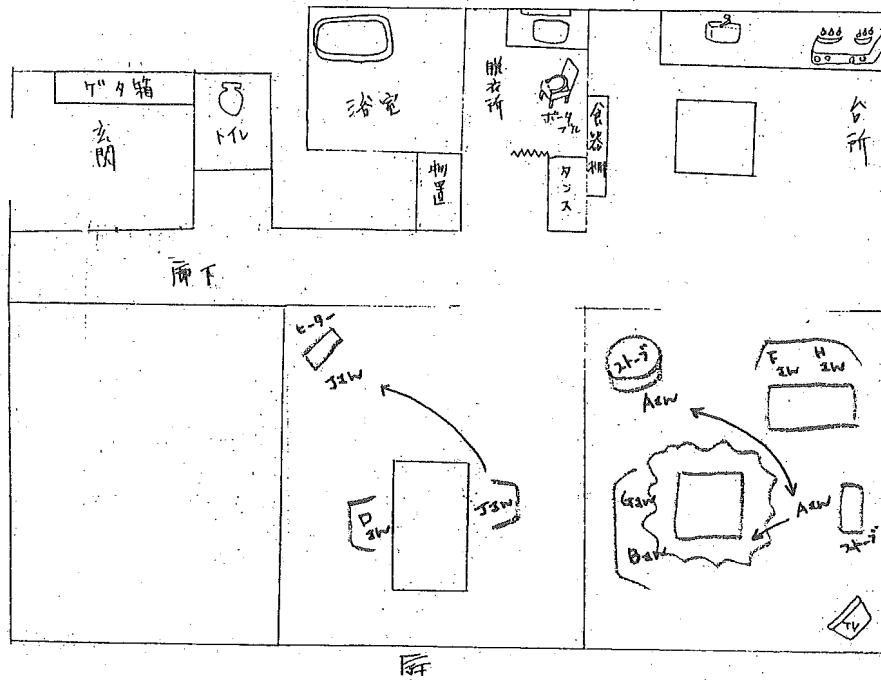
※Hさん骨折で、施設で2～3週間、療養。



6ヶ月目(12月～)

ソファよりこたつに足をつっこむ。

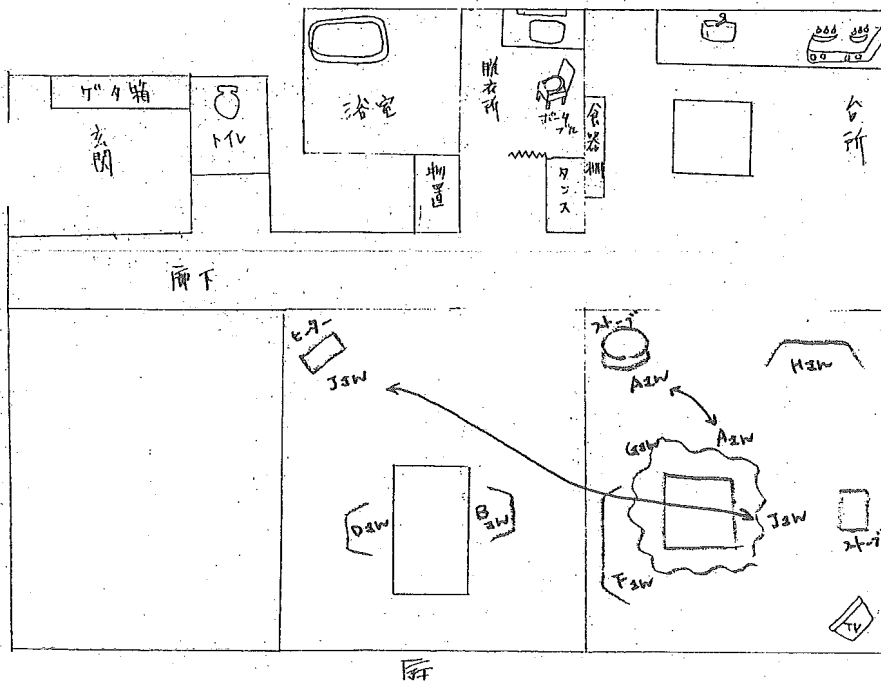
Aさん：あたたかい所をわたり歩く



7・8ヶ月目(12月後半～2月)

こたつに正座、長座で、Aさん・Gさん・Jさんが入るようになる。

Dさん：Bさんと話が合うことが多く、落ち着いてすごすことが多くなる

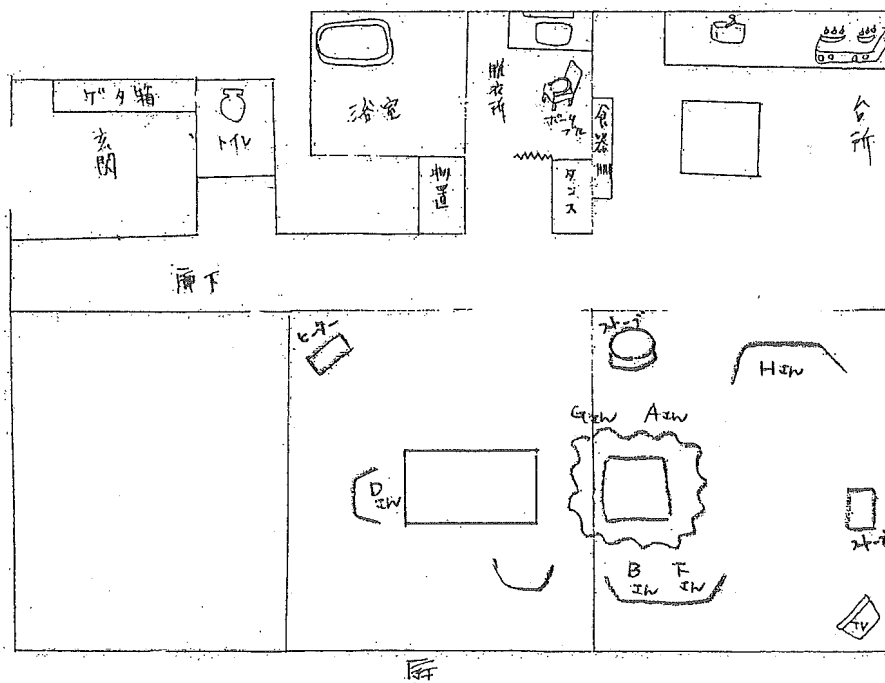


現在(2月中旬～現在)

机をこたつに近づける。

Bさん・Fさん：文句を言いながらも、隣同士で座っている。

離れるととても静かでさみしそう



民家の変化を見て、意見交換

- 「みんな、ほとんど同じ位置にいてすごしている」

食事もここで食べている。

- 「Aさんに居場所ができた」

AさんとGさんは、もともと仲が良かったが、Aさんが落ち着いてきて一緒にいる時間が長くなった。

- 「Bさんが動いた」

- ・Bさんが窓側だと、外を見たりするので、ここにしていたのだけれど…

- ・BさんとDさんは居室が同じで、BさんがDさんに近くなったことで、Dさんによく話しかけている。

- ・Bさんがトイレに行くために、Gさんが道をあけるために動かなければならず、「人の前を…」と嫌がっていた。Bさんがトイレに行くのを我慢してしまうので、場所を変わった。

↓

- ・Bさんが椅子にしか座れないのが、Gさんには受け入れられず、嫌がっている。

- ・BさんとGさんは仲が悪い。意図的に仲が悪い2人で、外出したことがあったが、その時は一緒にソフトクリームを食べていた。

↓

最近では外出してない。以前と勤務体制が変わって、民家ですごす時間が短くなったから。また、外出はDさん、Gさんを誘うことが多い。Dさんは玄関のところにいることが多いので、Gさんは何となくみんなの中で主導権を握っている人なので。

- 「Fさんが『水くれる?』『お茶くれる?』と言うと、Gさんが入れてくれる」

最近、隣りどおしになって。

- 「Fさんに『障子を閉めて』というと閉めてくれた」

Fさんが最近、窓側になって。

- 「Hさんがソファに寝ているのをJさんが『そこをどけて、私が寝る』と言っていたが、Jさんの席がソファに近くなってからは『寝ているなら仕方ないね』と言っている」

- 「Dさんが夕方頃になると玄関に行く」

- ・施設に帰ることが分かっているため、車を見に行く。

- ・玄関に先客のAさんがいて、スタッフに「Aさんと呼んできて」と言われると、Aさんを説得することに熱心になる

- 「Bさんは、家族が来ると誰の家族でも話しかける」

家族が座る場所と話す相手

Fさんの家族：Fさんの隣りに座って、Fさんとだけ話す。

行きと帰りには、みなに挨拶する。

10月頃から嫁が来るようになった。それまでは息子が施設に来るだけだった

Jさんの家族：Jさんの隣りに座る。

Aさんの家族：Aさんが出迎えるので、隣の部屋で一緒にすごす。

Aさんがいつもの場所にいる時は、その両隣りに家族が座る

Gさんの家族：Gさんの向かいなど、いろいろ。Aさん・Fさんなどとも話をする。

施設では、Gさんの隣りに座って、Gさんだけと話をしていた。

Bさんの家族：敬老会の時、Fさん・Hさんの間に座って、食事介助をしていた。

- 「施設と民家での位置関係が似ている」

Dさんは両方とも一人。

民家では落ち着いてきて位置関係が変わってきても、施設での関係に波及しない。

資料5：

これまでを振り返って自由討議

「 」が最初の言葉。
後は、その場で話し合った内容。

入居者とスタッフの関係について

- 「正直どうなるかと思った」
当初、入居者の一人がスタッフになぐりかかる事件があったが、現在、その入居者が、スタッフをかばってくれる立場に変わっている
- 「自分もののびのび、本人もののびのびして楽しい」
なじみの関係で安心しているのだと思う。
- 「民家ではそこだけしか見ないが、施設では全体を考えてしまう」
 - ・民家に比べて、施設では関わりが少ない。
 - ・ユニットを完全に分けていないためかナースコールがなっていると気になってしまう
 - ・ユニットでの動きではなく、施設全体の動きに合わせて動いている自分がある
 - ・他職員の動きが気になる。業務に忙しくしている。
 - ・民家ではそうでもないのに、施設では仕事が目について、しなければならないと思ってしまう。
 - ・動線の長さもあると思う。
- 「他のユニットでも、この人は向いているなと思う人を誘う」
これまでに他のユニットから、民家に行った人は、2人。2人とも、入居したてで、施設で居場所を見つけきれなかった。場面が変わることで、スタッフに関わることで、見えてくるものがある。
しかし、対応に困ったら民家というのは危険。なぜ施設では関われないのか、なぜ施設では見えてこないのか考えるべき。

入居者同士の関係について

- 「仲の悪さのバランス、悪口が出ることで歩みよっている」
 - ・みんな仲が良いというのではなくて、仲が悪い中でバランスを保って、居場所(位置関係)ができています。文句を言い合える関係は、親しい人とはできないのではないかと思います
 - ・DさんとAさん・Gさんが仲が悪い。Aさん・GさんがDさんの仕草が気になる。もともと、良く一緒にいるので、良く分かっているだけに、嫌なのでは。

民家に行く日と、行かずに施設ですごしている日の違い

- 「行かない日は、まわりに関心がない」
 - ・民家では、お互いに挨拶をし合う入居者が、施設では、目の前に座るまで分からないことがある。
 - ・スタッフが間に入らないと話がつながらなかったり、自分からトイレに行こうとしなかったりする。
 - ・施設では「することがない」と居室に帰って寝てしまう。民家では、食器の片づけをしているのに、施設では、スタッフがしている（入居者もそれを要求する）。
↓
 - ・何か抑制するものがあるのか、そういう雰囲気なのか。
これまでに、施設で、暗黙にそういうルールをつくってきってしまったのか
「民家に行ったからできる（施設ではムリ）」と逃げていた。
 - ・行かずに施設にいる日は、「何かすることない？」と聞かれて「今日は出かけないからゆっくりしてて」と言っていた。スタッフが休みモードに入っている。
「何かすることない？」というのは、何かしたいということ。

- ↓
- ・民家には「何かする」きっかけがたくさんあるが、施設では意図的につくらないとできない。

家族との関係について

- 「民家では家族が気兼ねなく遊びに来る」
 - 「来なかった家族も来る」
 - 「家族同士が仲良くなる」「家族同士でこれまでの話をしている」
 - ・本人の変化が、家族を変えたのでは
 - ・スタッフが家族から話を聞こうとした
- 「民家では家族が台所に立つ」
 - そうしやすい。家族が手助けできる。話ができる。参加できる。
 - 施設では「私がしてはいけない」と思うのだろうか
 - 家族が入ることで、高齢者とスタッフの関係が変わる。コミュニティができる。
- 「Bさんの家族の言うことが変わってきた」
 - ・Bさんの家族が民家に来た時に、「もっとわがままな母親が見てみたい」と言っていた。Bさんはもともと我が強く、長男宅に引き取られてから自分を殺していると言う。
 - ・Bさんの家族は入浴介助をしたいと言っている。
 - ・煮豆を持ってきて、みんなで食べたり、この間は、全員に手編みのマフラーをプレゼントしてくれた。本人に目を向けるだけでなく、まわりにも向けてくれている。
 - ・施設では息子さんと一緒に来てすぐに帰っていたが、嫁だけが来るとゆっくりしていき、話す内容も変わってきた
- 「Jさんの家族と話をするようになった」
 - ・民家に通う了承を取るために連絡したところ、これまでJさんが庭いじりなどをしてきた話がでて、それをきっかけに話をするようになった。
 - ・家族とJさんだけだった関わりが、徐々に他のメンバーに広がっている。
 - ・Jさんが「2階」とよく言うので、施設の2階のことかと思っていたら、家族と話をしてみて、自宅が2階建でその2階を気にしていることが分かった(自分の部屋が2階にあった)。
- 「Fさんの家族が、『母の家に行く感覚で来れる』と言っている」
 - ・介護保険の訪問調査を民家でして、その時に嫁がはじめてこちらに来た。
 - ・Fさんは、施設では、家族のことをスタッフと同じように「お姉さん」と呼んでいたが、民家では嫁であることが分かるため。
 - ・Fさんが「死ぬのか」と繰り返し言っていた。家族とFさんとの関わり、声かけを見ていて、これまで食事を食べなかった時に、家族が「これを食べなかったら死んでしまうから、お願いだから食べてね」と言っていたことが分かった。

資料6：

「良い介護」「悪い介護」のブレインストーミング

「良い介護」

- ・楽しい
- ・安心感がある
- ・一緒に行動してみる
- ・心から笑える
- ・力づけてくれる
- ・共感する
- ・話を聞くことができる
- ・よりそう
- ・おいしい物を食べる
- ・一緒に笑う
- ・リラックスできる
- ・したいことができる
- ・一緒に食事をする
- ・一人ひとりのペースが合っている
- ・一緒に生活する
- ・スタッフと利用者がランク分けされない
- ・創造的
- ・一緒に行きたいところに行ってみる
- ・遠慮や気兼ねのない関係ができる
- ・選択肢がある
- ・気持ちがいい、心地良い
- ・相手と向き合う
- ・受け取ってくれる
- ・おだやか、安心
- ・家族も一緒
- ・共に育ち合う
- ・自然にふれ合う
- ・生活歴を理解できる
- ・信頼関係
- ・腰にタオルを巻いて入浴するような
- ・笑顔
- ・欲が出る
- ・自然体
- ・わがままを言える
- ・ずっと同じように暮らせる
- ・心がなごむ
- ・不安がない
- ・バリデーション

「悪い介護」

- ・いそぐ
- ・待たせる
- ・たたく
- ・見ないふり
- ・聞き流す
- ・うその笑顔
- ・言い訳
- ・無視
- ・問題老人とみる
- ・転ばせる
- ・無関心
- ・いばる
- ・物のように扱う
- ・業務中心
- ・全てやってしまう
- ・無理矢理やらせる
- ・ムスツとしている
- ・うその思いやり
- ・身体的なケアばかり考えてしまう
- ・赤ちゃん言葉
- ・自分ならして欲しくないことをする
- ・行動を止める
- ・いそがせる、せかせる
- ・「ちょっと待ってください」
- ・寝かせきり
- ・長靴を履いて、入浴介助するような
- ・ジャムが口元についていてもふかない
- ・何をするにも流れ作業
- ・呼ぶ
- ・すぐに薬に頼る
- ・鍵をかける
- ・とにかく、しょっちゅう動いている
- ・できないことに対して怒る
- ・悪いことに対して、とりあえず笑う
- ・感情を無視する
- ・感情的に介助する
- ・掃除用のゴム手袋で排泄介助するような

ブレインストーミングをしてみよう

一つの場合で、一人の利用者に「良い介護」をするために、もう一方の利用者に「悪い介護」をしてしまっていることがある。

どちらでもないような、「良い介護」「悪い介護」に分けきれない関わりがある。

資料 7 :

施設及び民家のすごし方をビデオ撮影して、スタッフの関わりを検討

施設(民家に行くまで 9:45 ~ 10:00 頃)

(場面)	(コメント)
スタッフはいない。 4 人が机に座っていて、2 人が机に つつぷして寝ている	「スタッフのいない時の状況をはじめて知った。 静かすぎてショック」 「D さんは民家では寝ないのに、寝ているなんて」 ↓ ・ 退屈すぎるのでは ・ 施設では、あまりにも動かないし、話さない。 スタッフがいないと「してはいけない」と思っ ているのだろうか
F さんが B さんに話しかけるが、 B さんはそっけない返事	「何度も話しかけて、あんなにされてるなんて知ら なかった」 ↓ あのテーブルに毎日顔合わせて、話すこともなくな るのかも。家族でも自分の部屋を持って、居間に 来るのだし、居間でも、誰かが座っていたりすると 座る場所が変わったりする。
スタッフが入ってくると、B さんが 大声で怒鳴り出す	「スタッフが入ってくると、急に声が大きくなるのは 待っていたのかも」 「いつも大声で怒鳴っていると思っていた」 ↓ ・ これまで聞き流していたように思う ・ “悪い介護” の「待たせる」になる。

民家(12:00 ~ 13:00)

(場面)	(コメント)
利用者が 1 人、食事の準備をしている	「お願いしているようで無理矢理させているのかも」 ↓ 「お願いします」と言うと、「そんな簡単なことくら い、あなたできるでしょう」と言われる。だから、 「私はこれをしますから、こちらをお願い」と言う ようにしている。 「家でなら、話をしながら、一緒に作業をするので、 ここでも、一緒に動きながら、話をしている」 ↓ “良い介護” の「自然体」「一緒に生活する」にあて はまる。でも、茶の間に戻ると、動きながら話がで きない 「いつも同じ人を誘っているけれども、違う人を誘っ てみようかと思う」

一緒に盛りつける

盛り付けている間に、スタッフ2人が、何度か台所に入出入りする

茶の間に一緒に戻ろうとするが、立ち上がるのに時間がかかる
「お尻が重い」と冗談を言って笑う。

茶の間で2人が話をしている。
ストーブの前で1人寝ている。

茶の間に炊飯器を持ってくる。
利用者の1人が手を拭いて、ご飯の盛りつけを始める

「皿の置き方に悩む。どうしたら手が届くか」

↓

皿は並べて置かなくても、横に積んで置けば、自分で並べながら、盛り付けるような気がする。

「おろしは、おろしたものをラップに包んで渡すと何なのかが分からない。大根を持って行って、その場でおろした方がいいのでは」

「スタッフ2人が一緒に動いている」

↓

一緒に動かなくても、1人が座って、茶の間で話をしていれば…

(早送りをしながらビデオを見て)

「スタッフの動きは早いのに、お年寄りの動きはあまり変わらない」

↓

ペースを合わせているようで、合っていない

「民家に行くと、冗談を言い合っているのが増える」

↓

- ・“良い介護”の「一緒に笑う」にあてはまる。
- ・頬に触り合っているのが、“良い介護”の「信頼関係」になるのかも。
- ・“悪い介護”の「うその笑い」も少しある。

「机の上の花が気になる。あそこに飾るのが本当にいいのか」

「ストーブの前で、頭が熱そう」

「ジャンパーも着たままで…」

「机の配置替えをした」

↓

- ・スタッフ一人と利用者一人の話に終わっていて、広がらないため
- ・一体的にすることが本当に良いのか。逃げ場がない
- ・選択肢を多くして、参加したいときに参加できるようにしたかった
- ・配置替えは“良い介護”の「創造的」になると思う

「手を洗いに行けると良いよね。消毒液を霧吹きしたので手を拭くのはさみしい」

「手を洗わないこともある。こっちも問題」

「炊飯器を茶の間に持ってきて、ご飯を盛り付けるのが、本当にいいのか」

ご飯の盛りつけをしていると、向かいに座っていた利用者が、邪魔にならないように、盛りつけ終わった茶碗を少しずつ手前にずらしている。しかし、スタッフが気づかずに、茶碗を持っていってしまう

「知らなかった」

↓

- ・“悪い介護”の「動きを止める」になる。
- ・前に座っているだけでも、茶碗をずらしたり茶碗についているご飯粒を取ったり、これまでの習慣が活かされている

「職員の動きが多い。座っていることがないよね」

↓

- ・ちょっとしたものを取りに行くために、動いていることが多いと思う。物の配置を考えたらどうか
- ・“悪い介護”の「とにかくしょっちゅう動いている」。
- ・この日は、もう1人の職員が、はじめて民家に来る人だったので、「私が動いた方が…」と思って。
- ・配置替えをしてからの方が動いている。でも、動線や距離だけの話でもないと思う。

：

施設(民家から帰ってきて 17:30～18:00頃)

(場面)

(コメント)

スタッフはいない
机にみんな座っている。
おしぼりを広げたり、たたんだり
髪に手をやったり
立ち上がったたり、座ったり

「落ち着きないよね」

↓

“悪い介護”の「ムスツとしてる」にあてはまる
みんなの表情がない。ボーツとしている。

ビデオを見ながら討論をしてみて

あらためて見てみると、いろいろなことがわかる。気づく。
スタッフがいない時に、みんながあまりにも静かでショックだった。
「他の人はこうしてるんだ」と他のスタッフの動きが分かった。

B. 研究方法

1) 調査対象

①施設概要

北海道札幌市にあるFグループホーム入所定員9名、職員6名、木造2階建て、敷地面積390.20㎡で、建物面積237.53㎡、1階部分5帖の居室が2部屋、12帖の居間、7.5帖の和室、浴室、食堂兼台所、トイレ、事務所があり、2階部分は7部屋の居室がありそれぞれの広さが6.5帖～10帖である。(間取り図1参照)

<施設方針>

基本的にはふつうの生活を基本とし、可能な方は職員と一緒に食事の準備をしたり、洗濯物を干したり、あくまでも暖かい家庭的な雰囲気をモットーとし、自立した生活を目指し、職員は見守ったり、サポートするという体制をとっている。

基本的な1日の流れは7:30と12:00、17:30に食事があり、それ以外は基本的には自由に過ごしている。外出に関しては職員の付き添いや家族の同伴にて可能。

調査方法

①調査期間

2002年2/7、2/8、2/9 7:00～18:00

②方法

本人、家族に同意を得、グループホームの1階リビング部分に小型のカメラ3台、ビデオカメラを1台、ワイヤレスマイクを3台設置し、1階の隣室事務所にモニター3台を観ながら調査者2名が非参与的に観察を行い、共有部分の居間における居住者の表情行動、発言を確認し、ケース周辺の状況、他の高齢者の状況について記述を行った。

(1)観察記述方法

QOLの測定指標としてはLawton.PMのPhiladelphia Geriatric Center Affect Rating Scale(表1参照)を参考に主に感情、気分を6つに分類し痴呆性高齢者における表情や行動、しぐさについて観察を基にコード化を行った。

QOL指標の分類に従った6つの情緒分類を時系列でカウントし、周辺状況、他者の行動をケース別に記述した。

<1>QOL尺度の選定について

表1 情緒分類項目 (Philadelphia Geriatric Center Affect Rating Scale参照)

楽しみ	表情 微笑む 笑う	しぐさ・行動 なでる 親しみの様子で触れる うなづく	発話 うたう 笑う
満足	穏やかな表情	動作が穏やか くつろいでいる	
関心	眼でものをわう じっとみつめる アイコンタクト 適確な反応	適確な反応 人やものに体を向けたり 動かす	返答する
怒り	雷をくいしばる しかめっ面 眉をひそめる 口をとがらせる 眼を細める 憤然とする	押しのける こぶしを振る	叫ぶ ののしる 威嚇する
不安	眉にしわを寄せる いらいらした表情	こぶしを握る そわそわ落ち着かない 同じ動作を繰り返す ため息 震え 足をゆする	頻回に呼ぶ 訴えの繰り返し 沈黙
抑うつ 悲哀	無表情 青白さ うつろ	涙をながす うなだれる 静止	じっととどまる なく

QOLの概念についてはLawton.PMによって整理された<1>行動能力、<2>外的環境の質、<3>心理的Well-being、<4>認知的自覚QOLの4つの領域がほぼ一般的であり、特に現在までのQOL測定に関する研究においては行動能力及び心理的well-beingに関する研究が多い。特に痴呆性高齢者に関するQOLに関しては他者からの観察による、本人の主観的な幸福感等を行動や表情等から類推する方法が一般的であり、通常のインタビューや自記式の質問紙等による自覚しているQOL等の情報収集が限定されていることから、本研究においても観察法を採用している。

特に観察法による心理的Well-beingの測定については信頼性、客観性について観察トレーニングや観察者間一致性を計ることによって保障されうるが、妥当性についての精度は確認が困難であるという欠点がある。しかし、Lawton.PMによるAffect Rating Scaleは表情や行動から情緒を測定するものであるが、表情と情緒やしぐさと情緒の研究は従来より心理学等の分野においてその研究の蓄積が十分であり特に表情と情緒についての関連研究はEkman and Friesenによる表情分類基準等

によっても一般性が保障されている。

よって、本研究では今回特にQOLの一面面として情緒をとりあげ、喜び、満足、関心、怒り、不安、悲哀等の情緒生起について測定を実施した。

〈2〉符号化の信頼性及び基準

本研究での測定尺度は主に表情、行動、発語であり、それらを6つの情緒に分類するという方法を採用している。それらの反応を分類化する際の信頼性について符号化の基準を、調査前に観察者間で確認した。

＜表情＞

表情の分類については、Paul Ekman & Wallace V. Friesen, UNMASKING THE FACE, Prentice-Hall, Inc., Englewood Cliffs, 1975における表情分類基準を参考にしている。(図2～図4参照)

図2 満足、喜びの表情

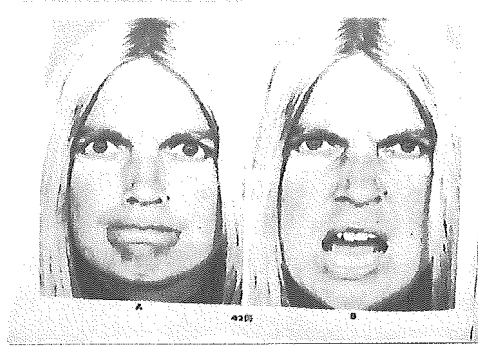


○特徴

- ・唇の両端は後ろへひかれ、多少上がっている
- ・口を開いていることもそうでないこともある。歯は見えたり、見えなかったりする。
- ・鼻から唇の両端を超えた外側まで走る皺が見られる。
- ・頬は持ち上げられている
- ・下瞼の下に皺が見える。下瞼は持ち上げられているかも知れないが、緊張はしていない。
- ・目じりからカラスの足跡の皺が外へ広がっている。

(工藤力訳編「表情分析入門」P142-P143、1987より引用)

図3 怒りの表情

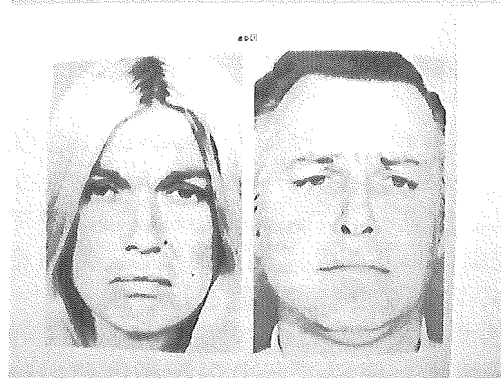


○特徴

- ・眉は下がり、引き寄せられる
- ・眉の間に縦皺ができる。
- ・下瞼は緊張し、それが持ち上げられることもあるし、持ち上げられていないこともある。
- ・上瞼は緊張し、眉の動きに応じてそれは下がることもあるし、下がらないこともある。
- ・眼は見開いて凝視し、出目のようにみえるかもしれない。
- ・唇は2つの基本的な形のいずれかになっている。唇はその端がまっすぐか下がった形でしっかりと押しつけられるように結ばれている。或いは大声で叫んでいるときのように、四角い形の緊張した開口をしている。
- ・鼻孔は拡張しているが、必ずしも怒りの表情になくてはならないものではなく、悲しみの表情にも共通している。
- ・怒りは顔の3つの領域すべてにあらわれない限りあいまいとなる。

(工藤力訳編「表情分析入門」P123-P124、1987より引用)

図4 悲しみの表情



○特徴

- ・眉の内側の両端が引き上げられている。

- ・眉の下は皮膚は三角形になり、内側の端は上がっている。
- ・上瞼の内側の端が持ち上げられている。
- ・唇の両端は上がっている。又は唇は震えている。

(工藤力訳編「表情分析入門」P160-P161、1987より引用)

関心及び不安については、表情からの符号化は困難であるため、特にしぐさ、行動からの分類に依存した。

＜しぐさ、行動＞

特に表情における喜び、満足、怒り、悲哀については顔の形状からの判断が比較的明確であり、観察者間による合致性は高いが、不安や関心といった表情の形態上の変化が乏しいものについてはしぐさや行動が情緒分類の基準となる。

姿勢、しぐさの分類については

Peter E. bull Posture and Gesture, International Series in Experimental Social Psychology, vol.16における姿勢分類システム及び、身体動作記号化分類システムを参考にしているが、しぐさや行動と情緒との関連研究は表情における研究よりも標準化の精度は相対的に高くはないと考えられる。それは表情のパターンは顔の形状は千差万別としても形状変化のパターンはそれほど多くはない。しかし、しぐさ、身体動作のパターンはその組合せを考慮すればほぼ無数に存在し、しかもその組合せごとの情緒相関は個人によってばらつきが大きいと考えられる。よって、本研究では、Bullの分類システムはあくまでも参考に、Lawtonの指標を解釈の基準とし、観察されたケースのしぐさ、行動について観察者間で解釈の検討を事前に行った。

③処理方法 観察期間3日中の1日間2/8についての観察データを使用し、1ケースに焦点をあて起床後から就寝時までの居間にいる間を連続で観察し、記述を行い、以下のデータ処理を行った

＜1＞カウントされた6つの感情についての生起頻度、場面ごとの生起頻度についての集計を実施。

＜2＞1日の流れの中での観察された感情

に関連している、周辺状況、他者の行動をカウントし、行動の種類、状況の種類について整理、分類しコード化を行い6つの感情別に関連している周辺事象及び本人に起こっている状況の抽出整理を実施。

＜3＞感情別の推移頻度をカウントし、感情推移に影響している要因との関係を分類整理した。

④対象選定

今回のグループホームにおける居住者9名中、入居して半年の最も新しいケースに焦点をあて、反応を記述し、関連する要因として他者の行動も含めた環境として全員の記述を行った。

C. 研究結果

1) 観察者間一貫性

表2 観察者間一貫性

		観察者B					
観察者A		喜び	満足	関心	怒り	不安	悲哀
	喜び	5	2	0	0	0	0
	満足	1	9	1	0	0	0
	関心	1	1	15	0	2	0
	怒り	0	0	0	0	2	0
	不安	0	0	1	0	6	0
	悲哀	0	0	0	0	0	0

一致比率=76.1%(N=46)

今回の手法は非参与による観察法であり、2人の観察者により特定のケースについて表情、行動、しぐさ、発言より6つの情緒に分類しコード化するものである。

よって、符号化の段階でのデータの信頼性については、観察者間一貫性について、7:00~15:00までのコーディングについて46ヶのコードを無作為に選び一致の比率を求めた。(表2参照)

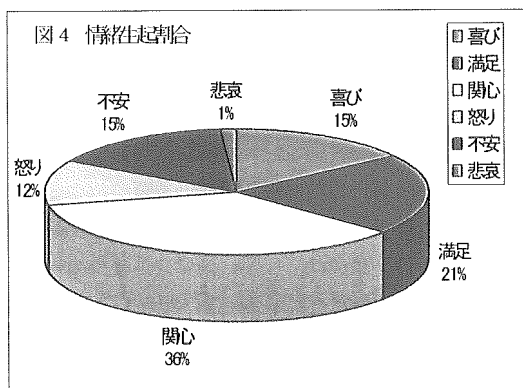
表情、行動等についての記述をベースとしているため、観察者による不一致は少ないと思われたが、一致率76.1%であった。

特に大きな不一致は、関心と不安、喜びと満足、怒りの確認についてであった。

2) 情緒生起頻度

表 3 情緒生起頻度(単位:回)

喜び	満足	関心	怒り	不安	悲哀	合計
21	29	49	16	21	2	138



7:00～18:00までの日中、半日間での居間において観察されたケースAについての各情緒反応の頻度と割合が表3と図4である。

11時間中に表情及びしぐさ、行為より観察された情緒反応総数は138回である。138回中、最も多い情緒反応は関心で49回(36%)、次いで満足29回(21%)、喜び21回(15%)である。今回の反応の中で最も少ないのは悲哀2回(1%)である。

特に「関心」が多いのは、共有部分での観察が主であるため、居室中での状況は不明であり、共有部分では基本的には他者が常に何かをしていたり、テレビがついていたり、職員が話し掛けたり、食事をしたりとやはり交流部分であったり、目的的な行動や、刺激が多いため、何かに注意を向けていたり、関心を向けている状況が多いためと考えられる。

「悲哀」の情緒反応が特に少ないのは、悲しみや抑うつといった気分が居間では比較的生じにくかったためと考えられる。それ以外の情緒反応についてはほぼ同じくらいの生起割合で生じている。

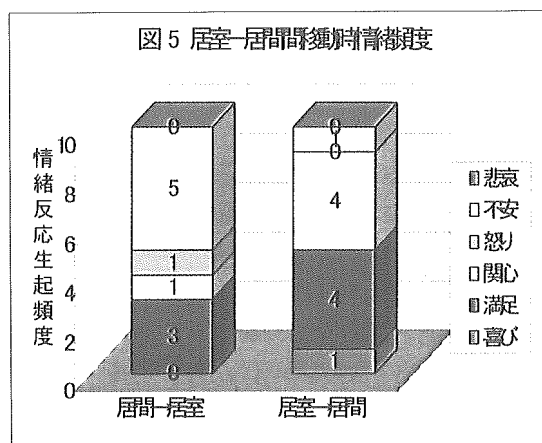
3) 居室～居間の移動時情緒頻度

特に小規模人数ケアといわれているグループホームの特性のひとつとして、個室と共有部分の使い分けによる生活の質への影響が考えられる。

よって、居間と居室の移動と移動時の情緒反応についてみていくこととする。

図5をみると、居間から居室へ移動した場合の各情緒反応の頻度と、居室から居間

に入ってきたときの各情緒反応の頻度につ



いて、今回は11時間中の移動回数は10回であった。

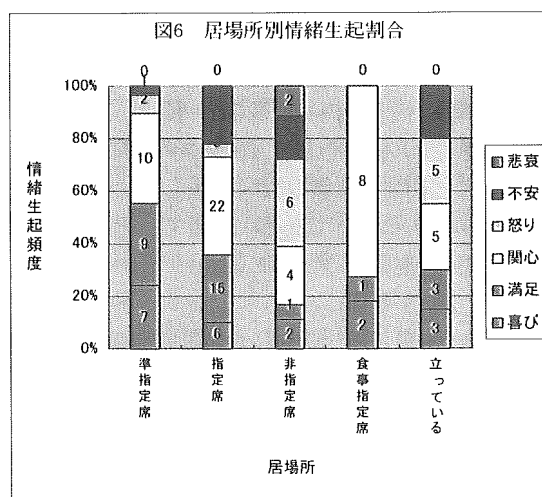
居間から居室へ移動するときに多く観察された情緒反応は「不安」で5回と半分、次いで満足3回であった。

それに対して居室から居間にもどってくる時に観察された情緒反応は「関心」が4回、満足が4回である。

つまり、比較的気分が落ち着いていたり、穏やかなときに、或いは退屈しそうなときに、居室と居間を使い分けているという点と、居間での不安な状態を落ち着けるために意図的か無意識に居間を出て、居室で落ち着こうとしている可能性も考えられる。

このように、居間と居室を自然に使い分けることによって自分の中での感情や気分をコントロール、調整していると考えられるだろう。

4) 居場所別の情緒反応の割合



グループホームは比較的小規模な空間の中で、小人数な共同生活者とともに暮らしていくということが特徴であるが、特に、小規模な空間、小人数による生活の利点として、個室以外の共有部分における自分の居場所をつくりやすく、小人数なため居場所を固定化しやすいというメリットが考えられる。

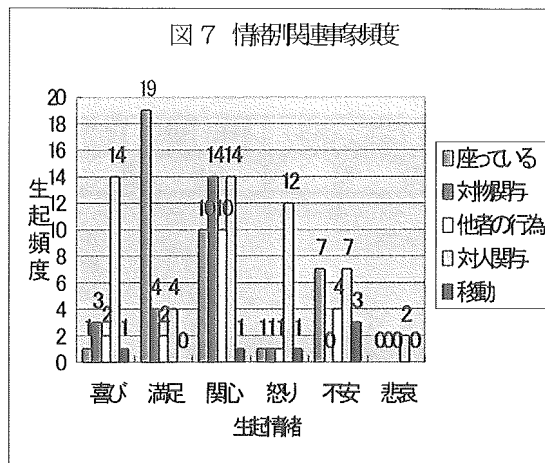
本調査においても、対象ケースの居間において座る席はほぼ決まっていた。当然、他者との関係においてはいつもと違う席にもすわらなければならない状況も多々あるが、それ以外はほとんど同じソファに座っていた。と同時に、一箇所だと他者に座られた場合に困るので、サブの指定席も決まっていた、この2つの席を行き来していた。食事の席については決められているようなのでほとんど固定であった。

ここでは、居間における居場所別の情緒反応についてみると(図6参照)頻度については、指定席にいる時間が長いので当然、各反応の頻度は多いが、割合については喜び、満足、関心、不安、怒り等ほぼ同じくらいの反応割合である。食事時の指定席について「関心」の比率が高いのは、食事や飲食をしている時間が長いために集中、関心の度合いが高いためである。「悲哀」、「怒り」の比率が特に高いのは非指定席であるが、これは通常、ほとんど座らない席であり、やはりあまり座りなれないいつもと違う場所は気分的にも、情緒的にも不安定になる比率が高いと考えられる。

しかし、指定席での「不安」の比率も特に低いわけではないので、なじんでいる場所においても不安になる可能性はおなじように高いと考えられる。

5) 情緒反応別の関連事象頻度

本調査の主たる目的は6つの情緒反応の生起にどのような要因が関係しているのかを明らかにすることである。よって、それらの情緒反応が生起した時に起こっていた直接、間接、周辺事象について5つに分類し、それぞれの頻度を図示した(図7参照)。関連事象分類については、「座っている」というのは、特に何かをしているわけでもなく、ぼおっと、視点もぼんやりと席にすわっている状

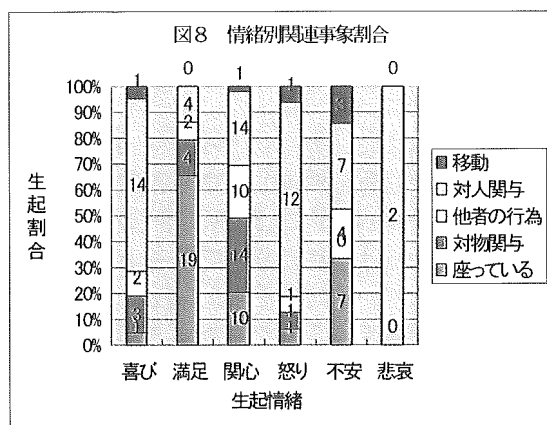


況を指している。「対物関与」については、何か目的的に関わっている状況であり、例えば、テレビをみていたり、食事をしていたり、猫を呼んでいたり、ぬいぐるみを扱っていたりと、直接的に人間とは交渉していないが、何かの物や、行為について目的的に関わっている状態を指している。「他者の行為」とは、本人の周辺で起こっている直接関係のない他者同士の交流であったり、職員の発語だったり、行動を指している。「対人関与」については、本人が直接的に他者と関わることであり、会話、アイコンタクト、触れる、はなしかける、はなしかけられる等を指している。「移動」については席を離れて部屋から出ていったり、部屋に入って来たりすることを指している。

特徴としては喜び、満足、関心といった快感情と対物関与は結びつきやすいということと、他者行為については、「関心」は当然であるが、「不安」にも影響しやすい。そして席に座ってぼおとしているのは満足や安心感、関心等の感情を起こしやすい反面、不安も引き起こしやすい状況であることが伺える。そして最も喜びに影響しているのは対人的な関与であるが同時に、対人的な関与は怒りや不安、悲哀等の不快感情も引き起こしやすいといえる。

6) 情緒別の関連事象の割合

先は頻度による比較を行ったが、各反応別の関連事象の割合について見てみると(図8参照)、喜びと怒りという反する感情について影響しているのは対人関与である。

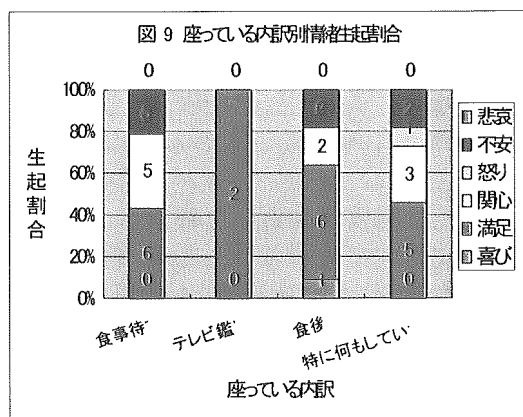


つまり、対人的な交流や、関わりはその質によって快感情も不快感情を同時に引き起こしてしまうといえる。

対物関与については特に関心での影響割合が高く、作業をしたり、生活の行為に参加したり、食事をしていたり目的的な行動や行為が気分を安定させる重要な要因であることが伺える。満足や安心感に影響しているのは席でくつろいでいたり、座ってゆったりしている状況である。やはり何もしないが、皆がいたり、何となくテレビが流れたりして、自分の席で座っている時間は比較的安定していると言える。

一方、座っている時での不安の生起も比較的多く、何もしていないというのは気分の安定と不安定の揺らぎや変化を作りやすい時間とも言えるだろう。

7)「座っている」の内訳別情緒生起割合



先では関連事象を5つに分類して、各情緒反応別に関連の割合を検討したが、以下ではそれぞれの関連事象の分類ごとにその内訳別に情緒反応の生起割合をみることにす

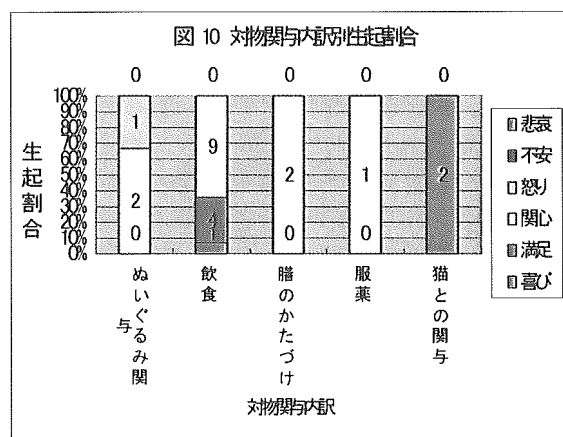
る。

特に座っている状態の中でもテレビ鑑賞における満足の比率が高く、逆にテレビを見ているときは安定しているといえる。食事前については食事という目的の為に待っている為、満足よりもやや緊張ぎみで意識が明確である。

食後についてはしばらくはゆったりと安定しているが、時間が経過してくると少し意識がはっきりしてきて刺激に対する反応が敏感になり、不安や喜びといった感情の起伏が大きくなっていくといえる。

特に何もなく座っているときは安心感もあるが、怒りや不安といった不快感情も生起しやすく、他者からのコントロールが必要となるだろう。

8)「対物関与」における内訳別 情緒反応の割合



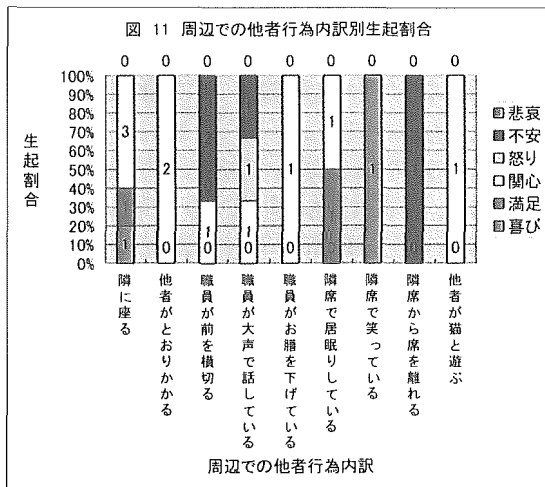
「対物関与」については、何か目的的に行動しているときが多いため、圧倒的に関心の割合が高く、特に食事については満足や喜びの生起にも関連している。

しかし、ぬいぐるみへの関与についてはぬいぐるみが汚くて、自分が座るソファにおいてあったことから、怒りを誘発している。特に物と言っても、生き物である猫とのかかわりについては、喜びを誘発しやすい。

総じて何か目的に関わることや、食事等については比較的気分は安定しているといえるだろう。

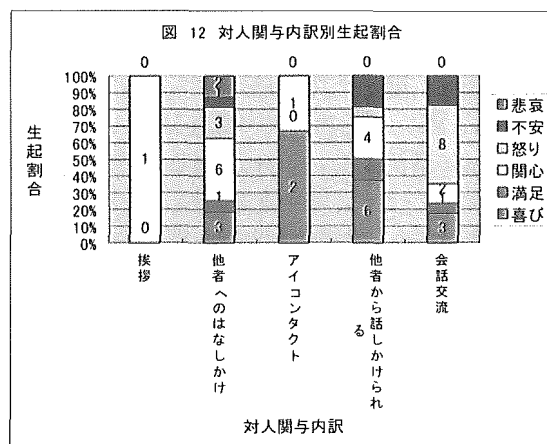
特に動物等のペットとの関与については本調査の本ケースについては快感情に大きく関連しているといえるだろう。

9) 周辺における他者の行為内訳別の情緒生起割合



本人の周りで起こっていて直接関係のない、他者の行為や行動による影響については、総じて関心の割合が高い。次いで特徴的なのは、職員が前を横切ったり、大声を発していたり、他者が隣でそわそわと落ち着かない場合は、不安を喚起しやすい。逆に、周りでの他者が笑っていたり、落ち着いている場合は喜びや、満足等の感情を誘発しやすく、まさに、居間での他の高齢者や職員の動きがそのまま高齢者の感情や気分に影響を与えているといえ、グループホームのような小規模なスペースであるための特性ともいえるだろう。

10) 対人関与の内訳別の情緒生起割合



直接的な対人接触については、喜びの生起率がどの項目についても比較的高い。しかし同時に怒りや不安の誘発にも影響を

していることが伺える。

特に他者への話しかけでは、返答がなかったことによる悲哀や悲しみ、落胆のような気分をも誘発している。

他者からの話しかけについても喜びと同時に不安の生起も誘発しており、これは話しかけられた内容がよく理解できなかったり、突然は話しかけられたりして気分が不安定になったりしているためと考えられる。

痴呆性高齢者にとっての対人交流は凡そ会話や接触の頻度を増やし、小人数による安定したなじみの関係を作りやすい。よって、認知の障害や記憶の障害による疎外感、孤独感を無くし、比較的安定した状態を作りやすいといわれている。しかし、対人的な接触は同時に不快感情をも生起させやすいということも含んでいる。つまり、対人接触の機会が多いことと、対人交流が円滑に行く事は同じことではなく、逆に密な人間関係になりやすいために、性格や考え方が違ったりするような場合は、それを調整し仲介する役割が重要と考えられるだろう。密な人間関係は喜びも喚起しやすい反面、不安や怒りも同時に喚起しやすいということである。

11) 情緒推移頻度及び確率

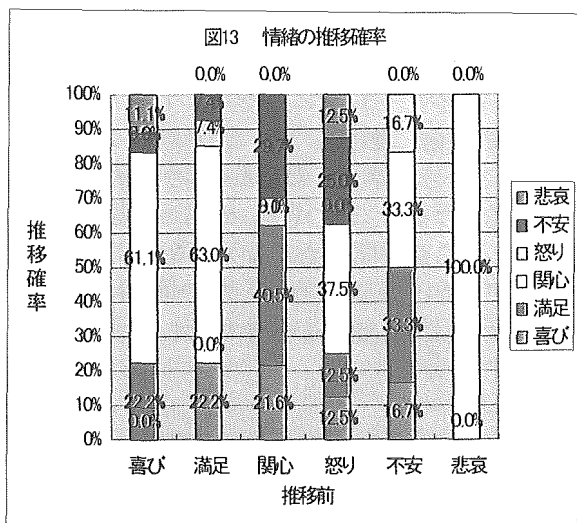
表4 情緒の推移頻度

		推移後					
推移前		喜び	満足	関心	怒り	不安	悲哀
	喜び	0	4	11	0	1	2
	満足	6	0	17	2	2	0
	関心	8	15	0	3	11	0
	怒り	1	1	3	0	2	1
	不安	3	6	6	3	0	0
	悲哀	0	0	2	0	0	0

前述までは感情が生起した時点における関連事象について分析検討したが、むしろ、グループホームにおける影響という観点からは、日常生活における感情の変化の方に注目し、変化に影響している要因を整理していくことによって質の高い痴呆介護の要素が明確になる可能性が高いと思われる。

よって、ここでは生起した感情が他の感情に推移する頻度及び推移確率について見ていきたい。

表4が推移頻度をあらわし、それを百分率であらわしたのが図13である。図13をみ



ると悲哀については今回の生起率が少ないために参考にはならないが、推移後の情緒としてはどの情緒についても関心への推移が全般的に多い。これは、関心自体の生起率が他の情緒反応に比較して多いことが影響していると考えられる事と、居間では周辺で何らかの刺激、例えば、テレビや新聞、他者の行動、職員の動き、猫、食事、膳のかたづけ等の刺激が多いため、関心や情緒といった反応が生じやすいためと考えられる。

喜びからの推移としては怒りへの推移がないのは自然である。満足への推移が22%と高い。喜びの後に安定しているは自然といえるだろう。

不安への推移については関心や怒りからの推移が多い。恐らく、不安の要素が刺激となって関心を示し不安になる場合と、怒りがおさまりながら不安へと変化する場合は考えられる。

怒りに推移しやすいのは不安であり、他に比べて最も多く16.7%となっている。喜びへの推移は、比較的どの情緒からも推移しやすいといえる。怒りや、不安という不快感情からも推移するのは恐らく、何らかの要因が怒りや不安を和らげ、そのような要因こそが、グループホームという小規模の特性をあらわしているといえる。よって、以下では、これらの推移に影響している関連事象について検討していきたい。

12) 喜びからの推移別関連事象頻度

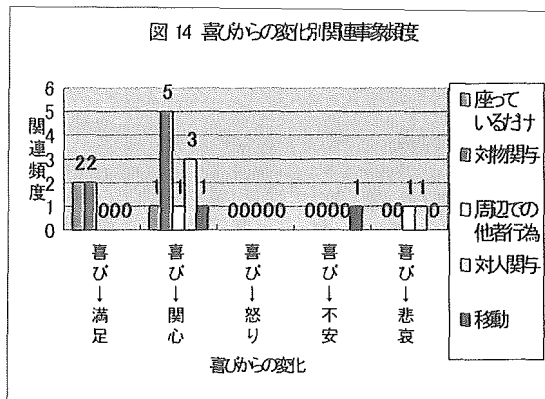
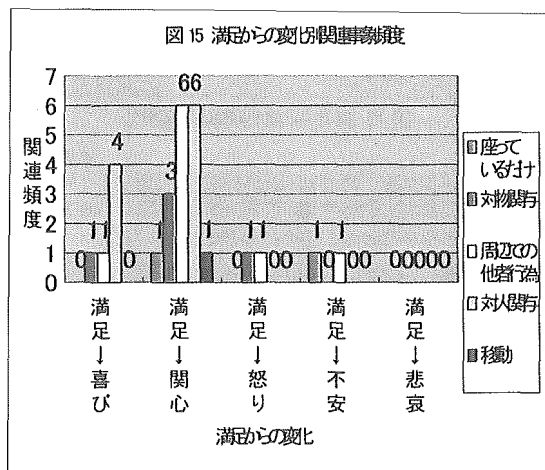


図14をみると喜びから満足や関心といった快感情への推移はソファでくつろいでいたり、何かに集中していたり、食事をしていたりといったことが影響している。逆に、悲哀への推移については対人関与が影響している。

つまり、対人関与はその質によって、快感情をも不快にしてしまうような影響力をもつことであり、人と関与していることだけで必ずしも良い影響要因として成立するのではなく、関与の仕方が重要であると考えられる。

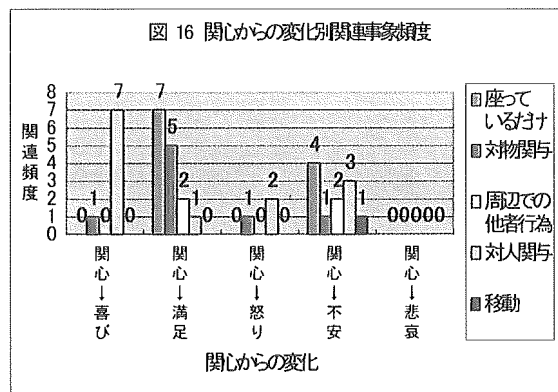
13) 満足からの推移別関連事象頻度

満足からの推移については対人関与が喜



びや関心への推移に影響していることが伺える。先の喜びからの推移とは逆に、対人関与が良く影響している例であろう。むしろ、満足や安心という状態からの関与は比較的良好な感情を誘発する可能性が高いとも考えられる。

14) 関心からの推移別関連事象頻度

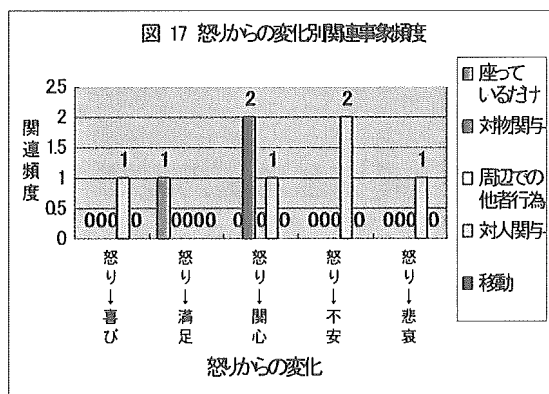


関心からの推移については、対人関与が喜び、不安への推移に強く影響し、椅子に座っている状況についても満足、不安への推移に影響している。

更に、対物関与については満足への推移に影響していることが伺える。

何かに関わっていることや食事をしていること等の目的的な行動は、関心といった状態を安定化させる要因がある事が考えられる。逆に対人関与や1人でぼおとしていたことは、快にも不快にも推移する可能性があり、対人関係の調整や、場の調整が意図的に行い、不快感情にならないように、快感情に推移するように誘導することが重要と考えられる。

15) 怒りからの推移別関連事象頻度

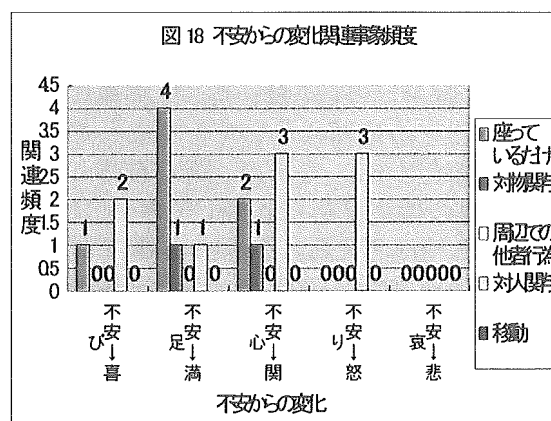


全般的に怒り自体の生起頻度が少ないため、あまりデータとしては参考にならないが、強いて言えば、全ての推移に対人的な関与が影響しているということである。怒りが生じた場合の反応として多いのは、まず、他者と意見が合わないこと、職員の対応が気に入らないこと、そして、怒りをぶつけたり、解

消するために他者にはなしかけたり、会話したりすることが多いため、対人関与の影響が多くなったと考えられる。

基本的には怒りを静めるのも、不安に推移させるのも他者ということになるだろう。しかし、唯一、安定化に影響しているのは席に座って徐々に気分が落ち着くのを待つような状況だけである。つまり、いつも座っている指定の席で、しばらく時間をおくような環境があれば、怒りは特に上手に対応しない限りは、他者が関わるよりも効果が大きいとも考えられる。

16) 不安からの推移別関連事象頻度



不安からの喜び、満足、関心といった快感情への推移に影響しているのは全てソファで座っているだけという状況である。

それ以外には食事や、何か目的的に集中している場合である。

ここでも対人関与や喜びへも推移させるが、怒りへの推移にも影響している。ここでも1人で指定席にすわって時間が解決するのを待つことが、重要となっている。

特に、対人技術が優れている場合には対人交流はとても有効であるが、そうでない場合は逆効果であることがここにおいても示唆されている。

17) 悲哀からの推移別関連事象頻度

今回の観察では悲哀という状態自体があまり観察されなかったため、データの比較についてはあまり参考とはならないが、2回あった悲哀については両方とも周辺での他者の行動、行為によって関心に推移している。